

旅・いろいろ地球人

「中南米博物館紀行」 鈴木紀（国立民族学博物館教授）

(1) プエルトリコ 2019年5月11日刊行

この5年ほどの間に、中南米の先住民文化を展示する博物館を100以上訪問した。ジャンルは考古学、歴史学、人類学、アートなど多様だ。博物館を手がかりに、中南米とはどのような地域か考えてみたい。

中南米は歴史的な概念だ。南北アメリカ大陸の中で、メキシコとカリブ海以南を中南米と呼ぶ。それは16世紀以降、この地域に主にスペイン語やポルトガル語を話す人々が移住したためである。

それでは中南米の玄関はどこだろうか。スペインによる初期の植民活動の拠点となったカリブ海の大アンティル諸島地方がそれにあたりと私は考えている。アメリカ合衆国の自治連邦区のプエルトリコもそこに位置する島の一つである。

アメリカス博物館はプエルトリコの首都サンファンにある。この博物館の特色は、その名前にある。アメリカを複数形にして名乗り、アメリカ大陸に多様な文化があることを示している。なるほど、この博物館では中南米各地の民衆芸術の展示が楽しめる。アフリカの遺産を強調していることももう一つの特色だ。アフリカの文化や奴隷貿易の歴史が紹介されている。

アメリカス博物館を見学すると、中南米という大きな屋敷の玄関から、いくつもの部屋を見渡しているような感覚にとらわれる。



先住民・黒人・白人の文化の融合を示すアメリカス博物館の展示場＝サンファンで
2019年2月、筆者撮影

(2) ウシュアエア 2019年5月18日刊行

中南米の出発点がカリブ海地方だとすれば、その終点はどこだろうか。新大陸への入植者の大半はヨーロッパ出身だが、彼らの故郷から地理的に最も遠いアルゼンチン南部のウシュアエアを終点とみなすこともできるだろう。

この町は南米大陸の南に浮かぶフエゴ島に位置する。1520年、世界一周を目指すマゼランが、このあたりで夜間に焚火を見たという記録にちなみ、スペイン語で火（フエゴ）の島という名称が定着した。

ウシュアエアには、「最果て（フィン・デル・ムンド）」という名前の小さな博物館がある。展示の半分は、南極に近いこの地方に生息するペンギンやアザラシなどの動物の生態に関するものである。後の半分はフエゴ島の歴史が扱われ、島の発展の歩みと、先住民族の文化について学ぶことができる。

マゼランが目撃した焚火で暖をとっていた人々の子孫の暮らしは、その後350年以上、比較的平穏だった。しかし19世紀の後半以降、ゴールドラッシュと牧場開発によって入植者が急増し、先住民族は殺りくの対象になった。彼らの文化を紹介する博物館の記述は、すべて過去形だ。

最果ての地、ウシュアエアから中南米を振り返ると、先住民族の犠牲の上に歴史が築かれてきたことにあらためて気づかされる。



「最果て博物館」の庭にある先住民族ヤーガンの子孫たちの写真=ウシュアエアで
2018年12月、筆者撮影

(3) ティワナク 2019年5月25日刊行

アンデス山脈は南米大陸の西側を南北 7500 キロにわたって貫く世界最長の山脈だ。ペルー南部からボリビアにかけては東西の幅も広がり、山々の間には標高 4000 メートル前後の高原が広がる。

ティワナクはそんなボリビア高地に位置する遺跡である。ボリビアの主要都市ラパス市から車で 2 時間程度、ユネスコの世界文化遺産にも登録されており、観光客に人気だ。近くには、出土品を集めた土器博物館と石碑博物館がある。中南米でも一、二を争う高所の博物館であろう。

考古学の博物館には年表がつきものだが、土器博物館の年表はきわめてユニークだ。中央に紀元前 2 世紀から紀元後 12 世紀にかけて栄えたティワナク文明が記載されている。その後はインカ帝国の時代となり、インカ皇帝の肖像が描かれている。

驚きはその次である。普通はスペインの征服と植民地時代が続くはずだが、この年表ではいきなり現代になっている。そして説明として、ボリビアのモラレス大統領の写真が貼ってある。このため年表上ではインカ皇帝と大統領が隣に並んでいる。

博物館は学術的な研究成果を展示する場だが、政治的なメッセージを発する場ともなる。ティワナクはインカに比肩する文明としてボリビア人の文化的アイデンティティーの象徴なのだ。



遺跡のそばで土産物売る現地の女性＝ティワナクで 2018 年 2 月、筆者撮影

(4) パナマ 2019年6月1日刊行

広大な中南米の中心はどこだろうか。人、動物、物の移動の要であるパナマがそれにあたるといえよう。パナマは中米と南米をつなぐ地峡地帯にあり、その狭さを利用して、20世紀初頭にパナマ運河が建設された。

運河に関する情報は、首都パナマ市旧市街にあるパナマ運河博物館が詳しい。運河建設の主な目的がアメリカ合衆国東西間の運輸力の強化にあったこと、建設作業はマラリアとの戦いで、過酷な労働に耐えかねて中国人労働者が集団自決をはかったことなどが紹介されている。建設にたずさわった唯一の日本人技師、青山士（あきら）の記録も見られる。

パナマの要衝としての重要性は、実はもっと古い時代から始まっている。約300万年前の鮮新世にパナマ地峡が形成され、南北アメリカ大陸に別れて生息していた動物が双方向に移動しはじめた。パナマ市郊外のビオ博物館では、「アメリカ大陸間大交差」といわれるこの現象を詳しく展示している。北から南に向かったサーベルタイガーや、南から北に進んだグリプトドン（巨大なアルマジロの仲間）など、今は絶滅した種の実物大の模型がずらりと並ぶ。

二つの博物館を訪ねると、パナマでは海洋が閉ざされることで南北が結ばれ、海洋をつなぐことで東西が結ばれたことに気づかされる。



グリプトドンの模型＝パナマ市郊外のビオ博物館で2019年2月、筆者撮影